

3月29日(土) 鬼島太鼓調布講演 青春を弾つ!

毎年恒例となっている鬼島太鼓の定期公演が次の通り行われます。ふるつてご参加ください。



会報原稿募集中!

【送付先】〒389の2392 木島平村役場内 ふるさと応援団事務局
fax 02669の82の4121 ✉ kicho@kijimadaira.jp まで



日 時	平成26年3月29日(土) 14:00 開演(開場 13:30)
場 所	調布市文化会館たづくり くすのきホール
先 着	500名 入場料 無料
問合せ	調布市文化振興課 TEL042-481-7139

雪が降ると思ひ出す木島平の友達

埼玉県さいたま市 清水 正明

さいたま市では、2月上旬に2度ほど雪が舞い、屋根や木々が薄い白い化粧を纏いました。この僅かな雪が、格好の話題となる所に長年住み慣れた私にとって、各地のスキー場の降雪量が格別な興味の対象となります。「木島平のゲレンデでは、雪はどの位積もったかな。」「降り過ぎて、お客の足が遠のくと困るな。」などと、少年時代を雪深い旧穂高村で過ごした私には、雪との長い闘いの生活よりも雪との交わりの深さが、木島平への思いを一層強めます。

太平洋戦争の終結直後の少年達には、冬のスポーツはスキーが全てでした。誰も粗末な用具しか持っていないかもしれませんが、雪だけはたっぷり天から与えられ、村内のあちこちに自前のスキー場を作りました。樽川の堤防や樽川橋のたもとの塚の斜面などは、可愛い少年向けゲレンデとなり、粗末なズボンの尻が凍るのも忘れて、皆夕方まで滑ったり転んだりの毎日でした。

その元気な仲間達の中に、ひと際目立ってスキーが上手な2人の少年がいました。2人とも両膝を巧み屈伸して上半身を安定させ、短い斜面でも見事なスラロームで滑り降りて、皆の喝采を浴びたものです。1人は大柄な藤島耕造君、小柄なもう1人の少年は肉屋の畔上君でした。子供心にもこの2人はスキーで大成するだろうなと、羨ましく感じたものでした。

私は、この冬が終わって直ぐに旧穂高村を離れましたから、その後の2人の消息は余り詳しくありませんが、確か藤島君はスラローム競技のスキー選手として野沢宮林署から日本大学へ進み、



冬季オリンピックのスキー選手の候補になったと聞いています。その後、ご夫婦ともども日本でのプロスキーヤーの第1号となり、私の幼い時の予想のように、見事にスキーの技術で人生を築かれました。とりわけ藤島君の業績として上木島村に残るものは、木島平スキー場の上級者向けのパイオニアコースの設計に携わったことでしょう。

以前に木島平スキー場を訪れたとき、試しにパイオニアコースへリフトで登り、スタート地点の先の垂直に切り立った斜面を覗いた時、恐怖感で足が震えたのを覚えています。流石に最大斜度45度の偉大さです。

今日も木島平村には、さいたま市にはない雪が静かに降っていることでしょう。やがて訪れる春を待ちながら、雪の中で生活される村の皆さんに思いを馳せながら、筆を取りました。

次の原稿は、平沢出身の山城弘枝さんが、中学2年生の際に書いた作文です。役場の書物庫から偶然発見され、新年会で朗読したものを許可を得て掲載しています。文面は会報用に修正を加えています。

雪国の生活について

木島平中 二年二組 山城弘枝

雪国と聞いて、都会の人々はと思うでしょう。きつと、テレビなどでスキーの様子などを見て、「雪があつていいな」とうらやましがる人が多いと思います。

確かに雪国の子供たちは冬の訪れ、雪が積もるのを心から喜び、歓迎します。スキーとかソリなどに乗り、寒い朝は土地の形に関係なく、雪渡りをしてそこら中を歩くことができます。また山があればスキー場を開いて、観光客によつてのもうけもあります。確かに都会といわれ、雪のふらない地方の人がうらやましがるのも当たり前かと思われまふ。

しかし当たり前のことなのですが、雪国に住んでいるのは、遊びから成り立つ子供ばかりではなく、大人たちもいます。その人たちにとつての冬はどういうものなのでしょうか。私は、誰ひと

り、雪の訪れを喜ぶような人はいないと思うのです。それは、大人たちが、雪から与えられる苦勞さをわかつているからだと思います。そういうことから考えてみると、都会と呼ばれるものが雪国にはあまり成りたたなくて、雪国というものは、とかく、田舎と感ぜられやすいことがわかります。雪深い山奥の村などで人口過疎の問題が起こっているのも、考えてみれば、冬の雪のせいも含まれていると思います。

私にとつての雪は、まあ、あつても無くても良いという感じなのですが、雪が無ければ、冬の雪降ろしは全く必要が無くなるわけで、そういう仕事の嫌いな私にとつて素晴らしいことなのです。また、雪があるために、朝の登校が大変不自由です。というのも、普通の道である所でもなんでも、みんな白く真つ平になつてしまひ、朝の道を雪を掻きながら進んだり、また、ブルドーザーで掻いてあると、大変滑るので道で何回も転びます。そのときは、とても怖いし、転ばないように、足先に神経を集中しながら、本当に一歩、また一歩という感じで歩くので、もうそれだけで、相当神経の疲れを感じます。私たちのわがままみたいですが、雪の積もつた道をブルドーザーで掻いて、道を広くした後、道が滑らないようにしてくれる工夫が生まれれば、大変ありがたいと思います。このことは、冬道を歩く者の大部分が感じていると思います。

農業からみた雪国は、雪が降つて、積もっている時が一番、百姓の休みの時期だと思います。現に私の家でも、夏・秋ごろは時間さえあれば仕事仕事の明け暮れでしたが、雪が降つてからは、お父さんも、コタツにあたつてみかんを食べるといふ日課です。冬という期間が百姓にとつては、仕事の休憩期で、一番のんきにしていれるということが雪国での生活の一番特徴的なことだと思います。

雪国の生活を決める一番大きな物は、なんといつても雪なのです。でも、私は、うるさくてごちゃごちゃした都会よりも、どこかゆつたりとした感じの雪国のほうがずっといいように思えます。

